様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２２２９

研究課題名（和文）北欧北方宗教哲学における葛藤の原理―復讐・無垢・共生の精神史的ダイナミズム―

研究課題名（英文）The Principles of Conflicts in religious Philosophies in Northern Europe and the other Northern Areas -the ideal historical Dynamism of Revenge, Innocence and Coexistence

研究代表者
中里　巧（Nakazato, Satoshi）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：４０２７７３４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　北欧を含む北方地域全般の主に宗教習俗をとおして、人間の営みにおいて不可避な争いや殺戮を如何に恒久的に解決して、平和共存の道が可能かを、宗教哲学と精神史の観点から考察した。問題の核心は、人間の営みを、複層的に捉えずに単一的に捉えたり、もっぱら宗教教義のみから理解する誤りから、葛藤や争いが生じており、人間の営みを、複数の位相および信仰体験の表面の違いを超えて、意味や質そのもの同質性（魂の無垢）から理解することによって、平和共存の道は開かれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
宗教間の争いや憎悪による復讐行為を解決するためのひとつの糸口を提示する本研究成果の意義は、社会的にも学術的にも、ちいさいものではない。例えば、宗教的徳目として、キリスト教には隣人愛があり、仏教には慈悲があるが、隣人愛と慈悲が根底においては同質であることを見極めることができれば、仏教徒はキリスト教徒のうちに仏を見い出し、キリスト教徒は仏教とのうちにキリストを見出すことができるだろう。こうした無垢な心をもつことによって、宗教間の争いや復讐心を解消することが可能となる。

研究成果の概要（英文）：　Through the viewpoints of religious philosophies and ideal histories, I have considered, how it is possible to work out the peaceful coexistence and solid solution to the unavoidable conflict and slaughter. It is the heart of the problems, that conflict and struggle come from the single comprehension of human life and from the superiority of dogma, instead of multiple understanding. It is the way of the solution to the problems, to have a deep insight into the identity of the meaning and quality in multiple aspect and to overcome the difference in surfaces of religious experiences, in other words, to have a pure heart of innocent children.

研究分野：哲学

キーワード：平和　共生　復讐　北欧　北方　宗教哲学　精神史　葛藤

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、Ｈ２１～２４年度の科学研究費基盤研究 C「北方宗教哲学の共生原理と「神」概念—北方少数先住民族とキリスト教—」の成果をふまえて、おこなわれる。１．北欧北方倫理思想における「血の復讐」物語については、アイスランドのサガ・イヌイット民話・フィンランドのカレワラ・北方少数民族伝承やアイヌ伝承の研究において個別には紹介されており、２.「共生」についてはそれぞれの地域や民俗ならびに土俗宗教などの観点からの伝統的社会組織にかんする研究があり、３.「無垢・純真さ」については、それぞれの神話や民話におけるトリックスター・インナーチャイルドについて聖愚者などの物語が報告されているが、「復讐」・「共生」・「無垢・純真さ」を精神史的に鳥瞰してそのダイナミズムや根本的解決を提示する詳細かつ説得的な研究は国内国外において、おこなわれていない。

２．研究の目的

本研究は４年間にわたり、「北欧北方宗教哲学における葛藤の原理—復讐・無垢・共生の精神史的ダイナミズム」と題して、北欧北方宗教哲学思想の根底に在り続けてきた報復主義と共生の矛盾相克の精神史的関係を、時空間的に鳥瞰して、北欧諸国やその他の北方地域における神話・民話・法律・土俗宗教・キリスト教・啓蒙理性・商業経済などの個別事項をとおして、北欧北方精神史のダイナミズムを丹念に辿るとともに、北欧北方を含めた地球規模で絶えることのない現代社会における地域紛争や宗教間の争いなどに対して、積極的に一つの根本的解決策を提示しようと試みるものである。その大きなヒントは、北欧北方宗教哲学思想において子供の心にある無垢・純真さに対する眼差しであり、そうした無垢・純真さのもつ包容力である。（１）「無垢・純真さ」については、現代児童文学においてはドイツ人作家ミヒャエル＝エンデが、「子供の心」と呼んでいるものであり、エンデが主張する「子供の心」について、長野県に所在する黒姫童話館に所蔵されているエンデの膨大な遺稿や手稿などの資料を活用して、本研究をおこなっていく。黒姫童話館に所蔵されているエンデの膨大な資料の全体は、未だ、実質的に未解明なままであり、部分的に紹介されたり研究されたりしているけれども、全体をとおして研究されてはいないし、とりわけエンデの主張する「子供の心」についての本格的研究は今なお存在しない。（２）キリスト教正教は、キリスト教各派のなかで最も長い歴史と伝統をたもってきたにもかかわらず、日本においても西欧においても理解が進んでいない。キリスト教正教教義には、「原罪」論は存在せず、人間精神における「無垢」を認める教義を正教は伝統的に保持してきた。こうした正教の立場から本研究は、あらためて北欧北方宗教哲学原理を見直すことは、大きな意義を有している。なぜなら、北欧北方地域における最初期のキリスト教布教は、カトリック的であるとはいいがたく、多分に、正教的な特色を含んでいたからであり、正教布教の様子が詳細にうかがえるのは、近代におけるアラスカなどの北極圏域のイヌイットに対するキリスト教布教であり、個別的には、イヌイットが正教によるキリスト教布教を積極的に受容している事例があり、そこに、唯一神信仰にもとづくキリスト教の排他性を超えた特徴が散見されるため、この布教の様子を合わせて研究することは、重要な意義がある。（３）北欧における「復讐」観、さらに厳密に言えば、スカンディナヴィアにおける「血の復讐」観は、たんなる人間間の対立を増長するものではなくて、むしろ本来は、争いをあらかじめ抑止するための警告として成立した掟であり、したがって「血の復讐」という観念は、「共生」と必ずしも矛盾す

るだけの観念ではない。「血の復讐」には、家族や部族に対する「誇り」、倫理的―道徳的「美意識」、死者と一体的な家族観などがあり、こうしたさらに子細な事項についても、原理的な解明をおこなう必要があり、本研究は、そうした子細な事項についても、光を当てていく。（４）自然に対する理解の解明は、宗教間対立や復讐の連鎖を越える一つの大きなヒントを与える可能性を持っている。言い換えれば、一つの同じ神といっても、その神像は、地域・時代・民族・言語・文化などによって、大きく異なっていく。「一つの同じ神」という場合の一つは、個別性としての一つを指示するとともに、全体ないしは包括的な集合としての一つを指示してもいる。宗教間対立とりわけ唯一神信仰の短所である排他性・独善性を修正するためには、個別としての一つと集合としての一つを併せていく思想的学問的作業が必要である。本研究ではこの作業を、「共生」とりわけ「協働」という観念から探求していく。（５）北欧北方宗教哲学における葛藤の原理を考察するさい、一つの試金石になるのが 19 世紀デンマークの思想家セーレン＝キルケゴールである。キルケゴール思想の基底には、父ミカエルが抱えもっていた土俗宗教の呪詛観とキリスト教的愛という２つの要素、言い換えれば、復讐と共生が織り混ざっているとともに、無垢についての発想も垣間見ることができるからである。キルケゴール思想は、北欧北方宗教哲学における葛藤の原理を一つの判型を現しているとも云えるので、本研究においては、キルケゴール思想についても、研究全体との関連で、併せて考察・論究していく。

３．研究の方法

（１）「復讐」についてアイスランドのサガやエッダおよび北極圏に居住するイヌイット伝承をとおして、「復讐」の解決不能性の基底を解明する。（２）「共生」について北欧北方の少数民族を含む各民族文化における社会体制を維持する道徳や法観念および罰則規定について解明する。（３）「無垢」についてトリックスターやインナーチャイルドにかかわる土着宗教やキリスト教における民話や神話ならびに現代児童文学における「無垢」について解明する。（４）「土着宗教とキリスト教の衝突・受容」についてイヌイットや少数民族に対するキリスト教正教宣教の実態をとおして解明する。（５）全体を総括して、葛藤の原理のダイナミズムを詳細に提示する。より具体的には、北方関連資料データベースの構築・北方関連資料調査フィールドワーク・復讐や共生や無垢と云った主要概念と神話民話等の関連探索などをおこなっていく。

４．研究成果

（１）現代ドイツの作家ミヒャエル＝エンデの私文書とりわけ書簡を詳細にわたり、閲覧することをとおして、神話や宗教における無垢概念の位置づけや基本的考え方を解明することができた。

（２）神話や民話や宗教における復讐譚や共生思想とキリスト教の関係性については、とりわけキリスト教正教のうちに、そうした復讐譚や共生思想を受容するだけの許容度が充分にあることが確認された。また、復讐譚と共生思想の矛盾律を解く鍵もまた、キリスト教正教のなかに見出されうることを確認するとともに、近代デンマーク宗教思想家セーレン＝キルケゴールの建徳的著作のなかにも、矛盾律を解く鍵があることを確認した。

（３）無垢という概念は、北欧北方にのみ制約されるものではなくて、或る種の普遍性を帯びていることを見出した。例えば、宗教的徳目として、キリスト教には隣人愛があり、仏教には慈悲があるが、隣人愛と慈悲が根底においては同質であることを見極めることがで

きれば、仏教徒はキリスト教徒のうちに仏を見い出し、キリスト教徒は仏教とのうちにキリストを見出すことができるだろう。こうした無垢な心をもつことによって、宗教間の争いや復讐心を解消することが可能となる。このような無垢な心は、北欧北方文化においても、その他の地域の文化においても見出すことが可能であり、実際に、キリスト教徒とイヌイットなどとの共生事例は存在する。このようにあらためて、無垢という概念が、共生思想においてきわめて重要な位置を占めることが確認された。

（4）争いや理解の齟齬を超えて、共生思想を実現していくためには、一種の汎神論的見方・此岸と彼岸の相互性や可逆性・神秘主義的要素を許容する必要があることが確認された。

（5）キリスト教における神観である trinity は、三位一体と和訳するよりも至聖三者と和訳する方が適切であって、trinity は一体論的もしくは唯一神論的性格をもつと云うよりも、多神論的性格をもつものであり、これ自体が矛盾や葛藤を含んでおり、慈愛や無垢（聖性）といった宗教感情をとおして、力動的に調和を保っていることが確認された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 中里巧	４．巻 54
２．論文標題 キリスト教における幽霊などの理解と意識の古層	５．発行年 2020年
３．雑誌名 白山哲学	６．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里巧	４．巻 57
２．論文標題 闇と暴力からの回復－東方キリスト教的考察のための諸資料－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋学研究	６．最初と最後の頁 1－27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里巧	４．巻 16
２．論文標題 単独者概念についての新しい解釈あるいは現代的意義	５．発行年 2018年
３．雑誌名 新キェルケゴール研究	６．最初と最後の頁 ８６～９６
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中里巧	４．巻 35
２．論文標題 キルケゴールのキリスト教	５．発行年 2018年
３．雑誌名 北欧史研究	６．最初と最後の頁 ７９～８７
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里巧	４．巻 702
２．論文標題 レトリックと単独者とキリスト教正教―キルケゴールのキリスト教―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 理想	６．最初と最後の頁 ３７～４８
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里巧	４．巻 53
２．論文標題 シャーマン儀礼の一種としてのキリスト教の悪魔祓い	５．発行年 2019年
３．雑誌名 白山哲学	６．最初と最後の頁 １～２５
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里巧	４．巻 56
２．論文標題 神の宮―東方キリスト教会の言葉観と聖書の当該箇所―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東洋学研究	６．最初と最後の頁 ５１９～５４０
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里　巧	４．巻 15
２．論文標題 「自己生成」概念の精神史-キェルケゴール思想の固有性-	５．発行年 2017年
３．雑誌名 新キェルケゴール研究	６．最初と最後の頁 51～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中里　巧	4．巻 57
2．論文標題 現代的知性の再検討と希求される霊性	5．発行年 2017年
3．雑誌名 金光教教学研究所紀要	6．最初と最後の頁 103～130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中里　巧	4．巻 52
2．論文標題 北欧北方のシャーマニズムの霊性と日本神道の問題性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 白山哲学	6．最初と最後の頁 51～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中里　巧	4．巻 55
2．論文標題 東方キリスト教会の霊性への端緒	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東洋学研究	6．最初と最後の頁 120～135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中里巧
2．発表標題 キェルケゴールとキリスト教神秘主義思想－暗闇・絶望・沈黙をめぐる信仰体験－
3．学会等名 キェルケゴール協会
4．発表年 2019年

１．発表者名 中里巧
２．発表標題 マザーテレサの神秘主義－暗闇の体験と苦悩－
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中里巧
２．発表標題 キリスト教死者供養祈祷の儀礼史－K.マッカルをとおして－
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中里　巧
２．発表標題 単独者概念についての新しい解釈あるいは現代的意義
３．学会等名 キェルケゴール協会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中里　巧
２．発表標題 キリスト教における霊障と死者供養―K.マッカルの事例から―
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 北欧文化協会、バルトスカンディナビア研究会、中里　巧	４．発行年 2017年
２．出版社 丸善	５．総ページ数 659
３．書名 北欧文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関